

興福寺中金堂の調査

－第325次

1 はじめに

本調査は、平成10年度の中門、11年度の東面回廊等に続く、興福寺第1期境内整備事業の第3・4年次にあたる。調査区は、中金堂基壇を中心とする東西51m、南北36m、調査面積は1836㎡で、調査区内には中金堂基壇・北面回廊・中金堂前庭部等が含まれる。今回の調査では、中金堂創建期の様相およびその後の変遷の解明、明治初頭に出土した興福寺中金堂鎮壇具の埋納形態についての知見を得ることが期待された。

2000年春まで建っていた文政再建中金堂は、同年5月から8月にかけて解体され、12月には調査員立会のもと階段踏石・基壇化粧等の取外しが行われた。発掘調査は、2001年1月9日に開始し10月3日に終了した。その後、興福寺により、火災で破損した礎石や凝灰岩への保存処理が行われ、埋戻し完了は2002年1月31日である。

(馬場 基)

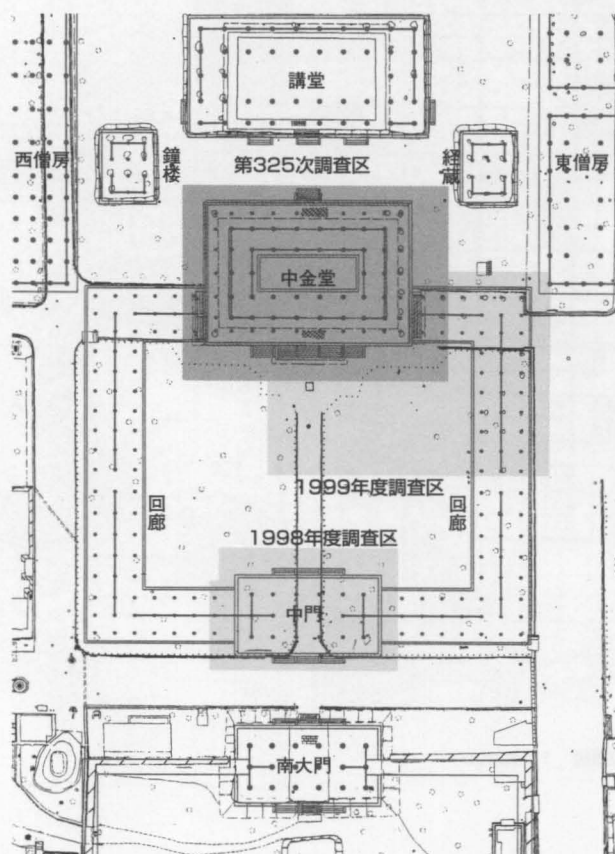


図96 第325次調査区位置図 1:1500

表17 中金堂焼亡年表

被災	再建供養
永承元年 (1046) 12月24日	永承3年 (1048) 3月2日
康平3年 (1060) 5月4日	治暦3年 (1067) 2月25日
嘉保3年 (1096) 9月25日	康和5年 (1103) 7月25日
治承4年 (1180) 12月28日	建久5年 (1194) 9月22日
建治3年 (1277) 7月26日	正安2年 (1300) 12月5日
嘉暦2年 (1327) 3月12日	応永6年 (1399) 3月11日
享保2年 (1717) 正月4日	文政2年 (1819) 9月25日

2 歴史と建築

創建期の中金堂は『興福寺流記』から桁行七間105尺・梁行58尺の主屋の四周に裳階が廻り、桁行全長が九間124尺と考えられる。南都の大寺の金堂として、規模、形式ともに最も整った代表的な建築といえる。平面柱間寸法については、大岡實が復原しているが(『南都七大寺の研究』中央公論美術出版 1966)、この復原では主屋部桁行全長が104尺で、『延暦記』の寸尺と合致しない。一方、創建の時期は他の大寺と異なり『続日本紀』に平城京移転記事がなく、養老四年十月丙申条の解釈などから種々の議論がある。

中金堂は七度の焼亡と再建を経てきた(表17参照)。永承再建建物は『今昔物語集』から、身舎上方の構造として、大虹梁上に天井桁を置き、組入天井とする形式が想定される。康和再建建物は『七大寺巡礼私記』から奈良時代同様の形式と考えられる。治承焼討後の再建時、東大寺が新技法を導入したのに対し、興福寺は伝統的な形式を踏襲した。「春日社寺曼荼羅」(個人蔵、鎌倉時代)の中金堂は、桁行七間寄棟造の主屋四周に吹き放しの裳階がとりつき、南面階段は身舎に対応する幅である。

嘉暦焼失後再建の中金堂は、『興福寺建築諸図』(東京国立博物館蔵)など多くの資料が残る。『建築諸図』の中金堂の平面図・梁行断面図は春日大工による実測図で、建築形態が詳しく判明する。平面は奈良時代以来の形式で、主屋は現存する応永再建東金堂と同様、側柱と入側柱を同高とし、瓦葺寄棟の大屋根をかける。軒先の出は約23尺と破格で、裳階屋根より外へ出る。裳階は吹き放しで、出が平と妻とで異なる振れ隅。主屋入側柱筋は南面以外の三面を壁とし、北面中央間をくぐり戸とする。

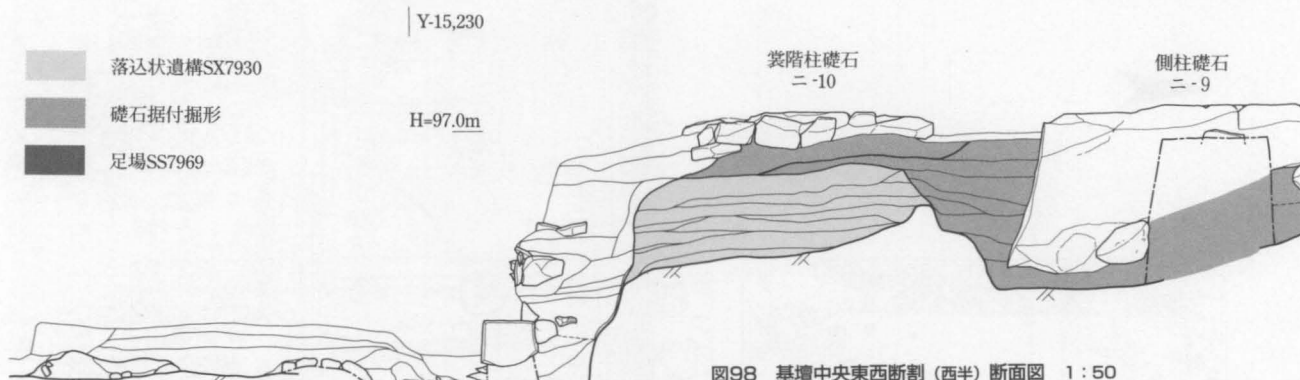


図98 基壇中央東西断割 (西半) 断面図 1:50

須弥壇は身舎一杯で、南面に一間幅の階段が付く。基壇南面階段は、身舎桁行に対応する五間幅である。以上のように、中金堂の建築は創建時の形式を踏襲し続けた。

享保火災後の再建は文政2年(1819)に至り、平面規模を裳階分縮小した「金堂仮殿」として実現された。明治5年の写真では、階段は三間幅で、基壇外装は石垣である。明治5年、興福寺は廃寺、中金堂は官没されて中教院等に転用され、床を張るなどの大改造が施された。明治7年に床張りの障害になる須弥壇が取り壊され、奈良時代の鎮壇具が出土した。明治14年に寺号復活が認められ、中金堂の仏堂への復興工事が行われた。その工事中の明治17年に再び鎮壇具が出土した。

変転を経ながらもこの堂は180年の長きにわたり建ち続け、「赤堂」と呼び親しまれていたが、平成12年、惜しまれつつ解体された。(清水重敦)

3 検出遺構

発掘調査の成果から、中金堂について4期、絵図なども参考にすると5期にわたる変遷が確認された。Ⅰ期(創建期)、Ⅱ期(奈良・平安時代)、Ⅲ期(中世)、Ⅳ期(近世後期)、Ⅴ期(廃仏毀釈以降)である。

中金堂基壇

中金堂は、若草山西麓から西へ伸びる春日野台地の西端部、大阪層群の一部で砂礫を含む明黄色粘土からなる独立小丘陵上にある。調査前の中金堂周辺の標高は、95.8m。周辺の西と南は崖状に落ち込み、北は緩やかに下がる。基壇は、この地山を削り出し平坦にした上に、厚さ50cmほどの版築を全体に均一に施して形成される。

基壇外側では標高95.2m、基壇上では96.6mで地山面を確認した。基壇高は、中央付近の版築最上面と、周囲の玉石敷き雨落溝SD8050底で比高差約1.8mである。

平面規模は、検出した基壇外装の外側で、Ⅰ期は東西40.28m・南北27.11m、Ⅱ期は東西40.93m・南北27.73m、Ⅴ期では東西40.93m・南北27.52mである。

落込み状遺構SX7925~7932 基壇の東壁で3基、北壁で1基、西壁で3基、南壁で1基が観察された。入側柱・側柱の礎石据付と同じ面から掘込み、SX7926では深さ1.1mをはかる。SX7925は基壇縁から80cm程度で

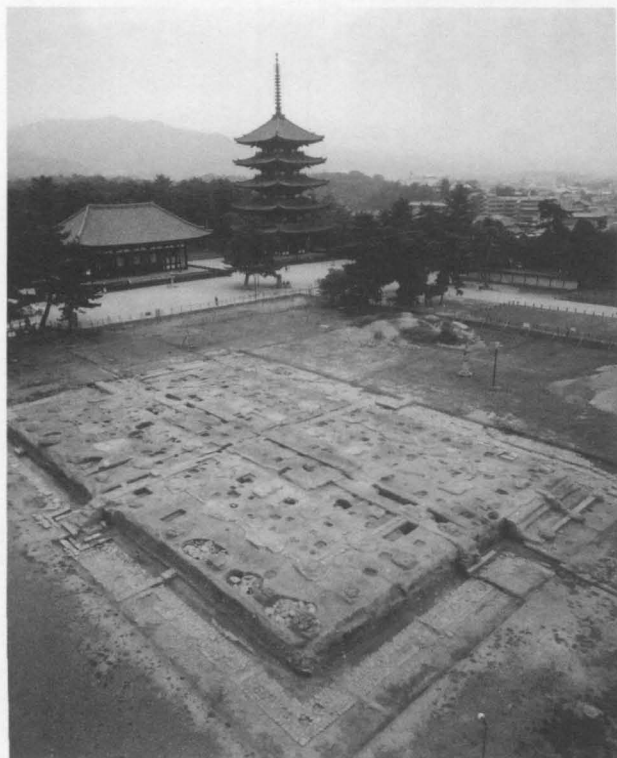


図99 調査区全景 (北西から)

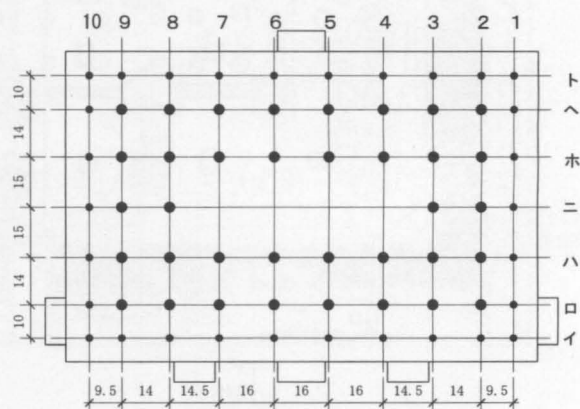
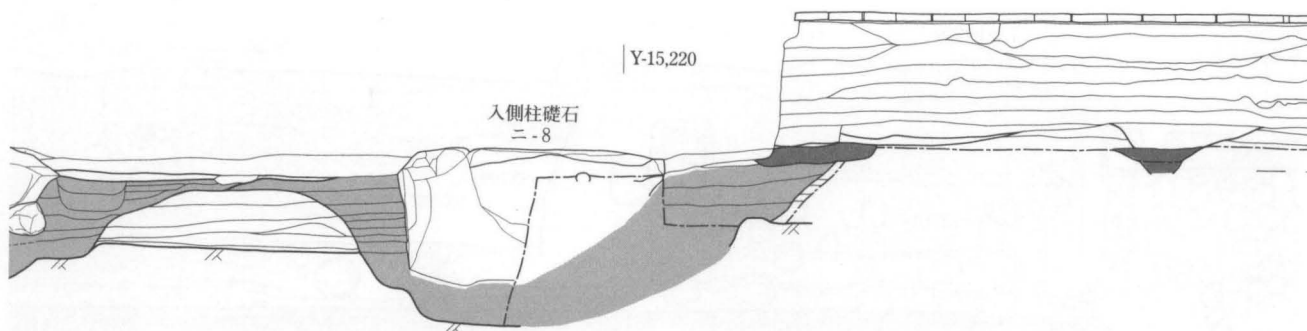


図100 礎石番付・柱間寸法図 (単位: R)



収まるが、SX7930は礎石据付掘形と連続して溝状の様相を示す。SX7932を断割った際に、地山面で柱穴SX7998と東西溝SD7999の南肩を検出した。

中金堂建物

中金堂SB8000 中金堂SB8000は、五間×二間の身舎四周に、庇・裳階がつく九間×六間の礎石建物である。Ⅳ・Ⅴ期は、裳階部分を除いた一回り小さい建物SB8100となる。SB8000の各柱間は今回の調査所見から図100の通り。基準尺長は、側柱筋で1尺=295mm。礎石は66基すべて現存する。礎石上面には焼痕をとどめ、外側の礎石ほど痛みが激しい。便宜上、東南隅を基点とし、西に1～10、北にイ～トと番付をした(図100)。

入側柱・側柱筋では、削り出した地山面から約40cmの版築を施し、そこから約90cm掘り下げる。30cm程の根石を置き礎石を据え、さらに基壇全体に版築を施す(図98)。礎石の外形は一定でないが、ニ-8で東西1.8m・南北1.3m・厚さ0.9m、ニ-9で東西2.2m・南北1.4m・厚さ1.1m。いずれも創建期のもので原位置を保つ。火災や再建の際の加工により、損傷を受けているが、多くの礎石で円型柱座・地覆座の痕跡が確認される。

裳階柱の礎石は、礎石ニ-10で東西1.6m・南北1.2m、厚さは推定0.4m。礎石の据付掘形は後述する足場穴より新しい(イ-4・ヘ-2)。現在の裳階柱礎石から大きくずれた据付掘形は検出されていない。

なお、安山岩製の2基(ト-3・8)は、上面に十字などの刻線を有し、据付埋土の様相も異なり、後代の据え直しが確実である。

壁SA7940 側柱筋にまわり、Ⅰ期の玉石の壁地覆根石列SX7941をともなう。裳階部分には柱間装置の遺構はなく、吹き放しだったと考えられる。

足場SS7948 一辺約70cmのほぼ方形の掘形を持つ柱穴が、東西9列・南北6列に並ぶ。須弥壇SX7950の積土の下にも広がることから、Ⅰ期建物を建てるための足場である。掘形から奈良時代の土器片が出土した。

須弥壇SX7950 Ⅰ～Ⅳ期の須弥壇SX7950は、東西約21m・南北約7.5m。南面中央に階段SX7951がつく。確認された積土は黒色土と黄褐色土の2層からなる。上層の黒色土中から、和同開珎や奈良時代の土器片が出土した。明治7年に削られ、本来の高さは不明だが、SX7951から80cm以上と推定される。

Ⅰ期の須弥壇外装は凝灰岩製で、地覆石SX7952・7953、地覆石抜取痕跡SX7954～7957からなる。礎石ハ-4～7にみられる段状加工痕跡や焼痕と列をなす。ハ-5では、SX7951にともなう痕跡がL字状に南に延びる。北入側柱礎石ホ-7などでは平坦面を作り出す。

足場SS7969 須弥壇SX7950の範囲にのみ分布する。黄褐色土上面から掘込まれ、黒色土で覆われる柱穴が東西9列・南北3列並ぶ。身舎荘厳のための足場であろう。

壁SA7958 身舎の南面を除く三方向に回る。ⅡまたはⅢ期に、北面中央を除く柱間中央に掘立柱の間柱SX7959～7966が立つ。間柱据付掘形は1.4m×0.8mで長辺を柱筋に直交させる。SX7961で深さ1.8m。柱抜取痕跡の直径は約50cmで、壁は強く焼ける。壁地覆石列SX7967は、SA7958の凝灰岩製の地覆石で、幅25cm程である。



図101 須弥壇全景(西から)

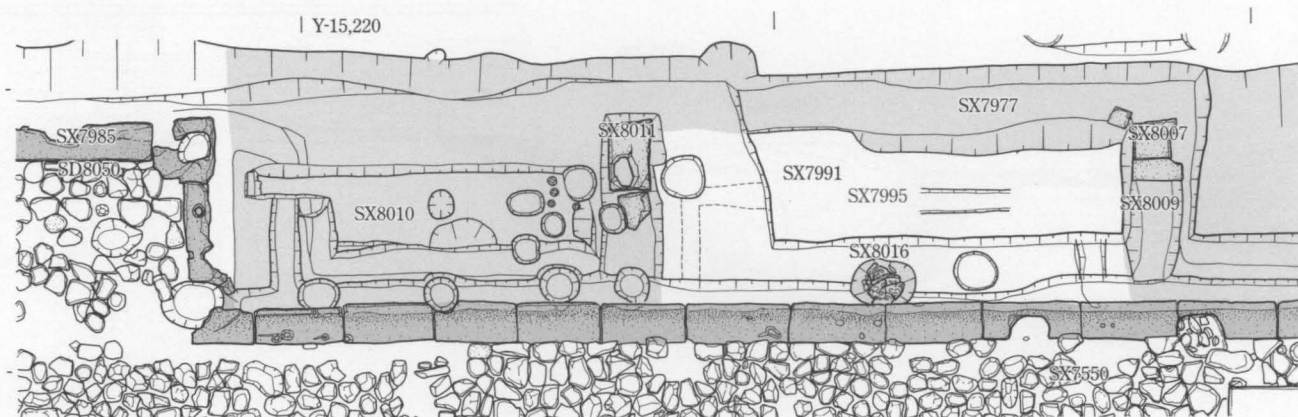


図102 南面階段平面図 1:80

基壇外装

I期基壇外装 凝灰岩製で、階段積土下で地覆石SX7971～7975、II期以降の階段積土下で拔取り痕跡SX7976～7978を検出した。北階段部分のSX7972では長さ70cm、奥行き27cm、高さ46cmであり、階段外側から24cm分の基壇側の上面幅8cmを深さ8cm程切り欠き、羽目石の仕口とする。他の地覆石もほぼ同じ大きさで、羽目石を載せる加工が施される。地覆石の抜取りのレベルはSX7978で95.3m、地覆石の下端もSX7975で95.3m。地覆石はいずれもほとんど風化していない。

II期基壇外装 一石が長さ105cm・奥行き40cm・厚さ17cm程の凝灰岩の延石列SX7981～7985からなる。延石は、いずれも基壇側10cm程の平坦面が残り外側はえぐれる（図106-1）。天端は約95.3mでI期地覆石より30cmほど低い。なおこれらは地覆石の可能性もある。南側基壇縁の凝灰岩SX7945・7946は葛石の痕跡とみられ、I・II期基壇外装は凝灰岩切石を用いた壇正積である。

III期以降の基壇外装 III期基壇外装に関わる遺構は検出していない。古図などから花崗岩の壇正積であろう。IV期の基壇外装は石垣SX7987である。V期の基壇外装は花崗岩の壇正積基壇SX7988である。

南面階段 (図102)

I期南面階段 身舎中央間および東西端の間に、一間幅の階段が計3基つく（SX8001・SX8005・SX8010）。幅は地覆石の外側で4.15mで、出は推定約2m。外装は凝灰岩製。SX8005東西の南北地覆石列SX8006・8007は、大きさが不揃いな長方形の切石を、外面を合わせて横長に並べる。SX8001西の南北地覆石SX8002も同様だが、SX8010東の南北地覆石SX8011は長方形の切石を南北に用いる。これらの凝灰岩はほとんど風化していない。階段地覆石の厚みは15cm、天端は95.32m程で、基壇本体の地覆石の天端よりも30cmほど低い。

II期南面階段 I期の階段の間に積土を施し、五間幅階段SX8020に改造する。この際に凝灰岩の外装を施し直す。SX8020の凝灰岩地覆石列SX8021は、一石の長さが約100cmで、それ以外の大きさ・形態・レベルはSX7985と一致する。幅は約24mで身舎正面の幅とほぼ一致し、出は約2m。SX8020で新たに積まれた積土からは奈良時代の土器のみが出土した。

IV・V期の南面階段 SB8100建設時に三間幅に切り縮めたSX8023である。近代に積土を足し外装を整える。調査前で階段幅13.6m、階段の出は2.8mであった。

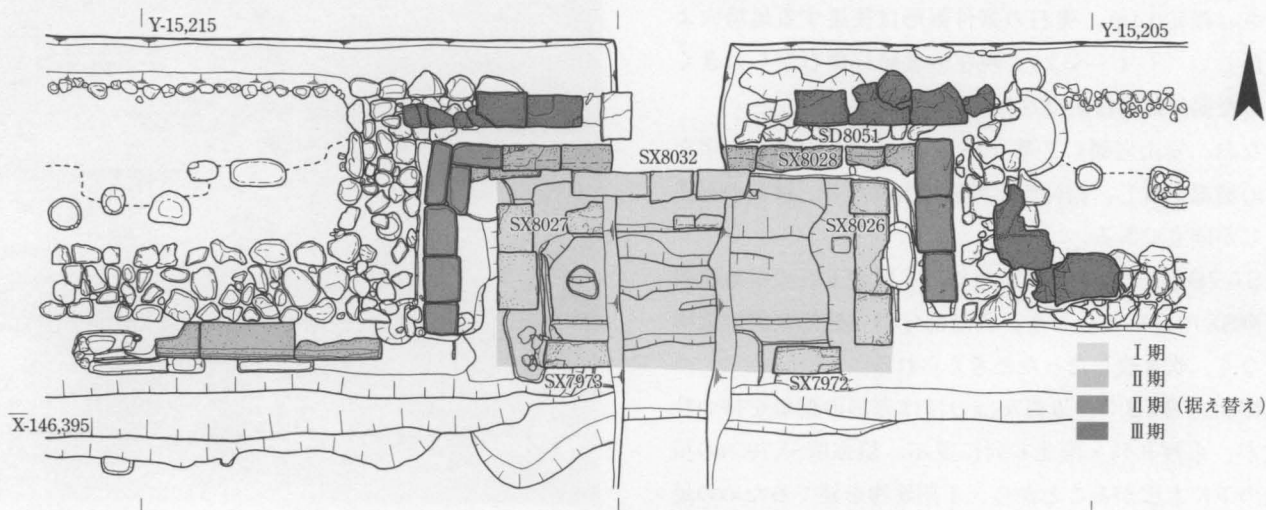
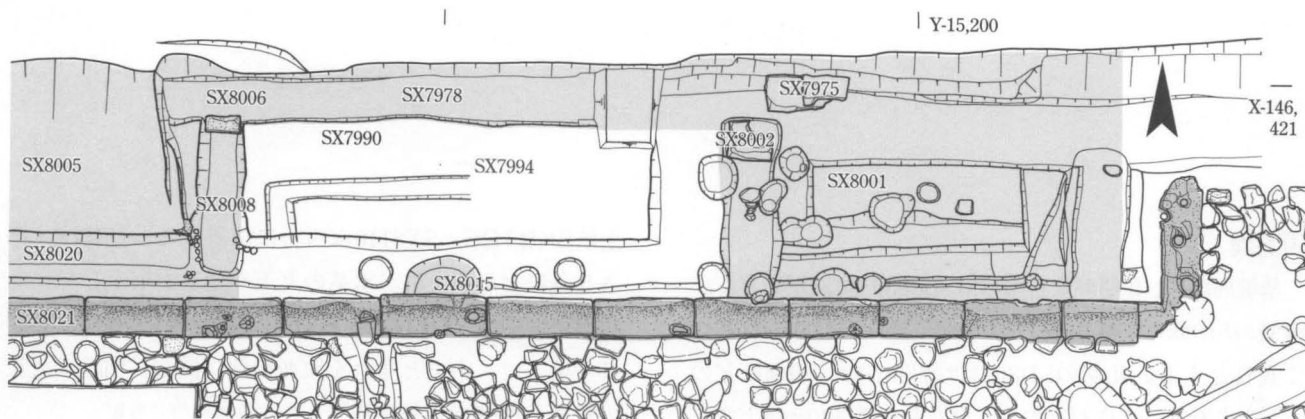


図103 北面階段平面図 1:80



北面階段 (図103)

北面階段は、全期間を通して一間幅である。

I期北面階段SX8025 幅4.15mで、出は1.85m。外装は凝灰岩製。地覆石列SX8026・8027は、厚さ約15cmで外面をそろえるが、長さ・奥行きは不揃い。天端は南面階段の地覆石の天端とほぼ同じである。基壇本体の地覆石より、出の部分の地覆石の方が低いといった状態などは、I期南面の状況と共通する。

II期北面階段SX8027 幅5.6m、出は1.85m。地覆石列SX8028は、厚さ20cmほどの凝灰岩を用い、外面は、後述する雨落溝SD8051にそろう。東西辺の地覆石の多くは花崗岩に据え変えられる。

V期北面階段SX8029 幅5.4m、出は1.9mである。

東・西面階段 (図104)

I期東面階段SX8030 出が推定約1.2mで、幅約5mの掘込地業をとまう。SB8000の裳階部分の一間分、およびSC8055に対応する。南半の断割部分で、地覆石または踏み石とみられる凝灰岩 (SX8031) を確認した。

II期東面階段SX8035 出が約1.2m。SX8030の北側に積土を施し拡張する。幅約8.4mで、SB8000の裳階柱筋から入側柱までの2間分、SC7510の幅に対応する。改造の時期はII期に先行する可能性もある。「宝字記」によると、奈良時代後半の回廊は複廊と考えられる。

V期東面階段SX8036 幅9.7m、出は2mである。

西面階段 大きく2時期の変遷 (SX8040・8045) と、掘込地業を確認した。SX8030・8035に対応する。



図104 東面階段北半部分 (東から)

雨落溝

基壇周囲に、Ⅱ期の玉石雨落溝SD8050・8051がめぐる。南側のSD8050は幅40cmで、20cmほどの玉石を2石並べて底石とする。北側のSD8051は幅60cmで、20cmほどの玉石を3石並べて底石とする。どちらも深さ10cmほどで、外側には玉石を用いた側石を立てるが、基壇側は基壇延石を側石に兼用する。SD8051は北階段SX8027の周囲にもめぐるが、南階段SX8020の周囲には雨落溝がない。

Ⅲ期には、後述するⅡ期玉石敷SX8075の上に凝灰岩切石がのる。中門の調査でも確認した雨葛であろう。遺存状況が悪く、中金堂北側では何カ所か確認できたものの、南面では一切検出できなかった。

廃仏毀釈以降の遺構

須弥壇SX8110 SX7950上に、明治17年以降積み直された須弥壇。東西20m・南北6m・高さ1m。

土坑SK8115 SX7950東半、黒色土から掘込む皿状の土坑。近代の遺物が出土し、SX8110に覆われるので、時期は明治7～17年。明治7年鎮壇具出土時に掘られたものであろう。金延金・コハク玉破片などが出土した。SX7950については断割調査に加え、金属探知器での調査も行ったが、土坑状の落ち込みや金属反応はなかった。

礎石SX8120 SX7950西半に位置し、上面に直径60cmの円形の平坦面を作り出す。石が据えられたのは明治7～17年。礎石西側中央付近の据付埋土最上層から、大量の水晶玉・真珠がまともって出土した。上面中央に一辺約30cm、高さ約45cm角柱石材を載せ、その上に一辺約45cmの正方形の石材をのせていた(図105)。これらは須弥壇築成時に埋まるが、最上部はSX8110の上に出て、SB8100で後補の支柱状の柱の礎石となっていた。



図105 礎石SX8120断割状況(北から)

土坑SK8125 SX8110南西角に位置する、径15cm・深さ5cmほどの小土坑。水晶の丸玉や辻玉が出土した。

鎮壇具埋納坑SX8101～8105 須弥壇SX8110上および基壇上で、中央とそれを東西南北に囲む、明治・大正の鎮壇具埋納坑5基を検出した(巻頭図版6参照)。

SX8101は、須弥壇中央で検出した東西100cm・南北105cm・深さ97cmの土坑。中央に水瓶形の容器を納めた木箱を据える。SX8102～8105は、鎮壇具を納めた同形式の箱形容器を据える。SX8102は、須弥壇中央から東に2.2mの地点で検出した鎮壇具埋納坑。東西31cm・南北47cm・深さ56cm。SX8104は、須弥壇中央から西に2.4mの地点で検出した鎮壇具埋納坑。東西30cm・南北54cm・深さ68cm。SX8105は、須弥壇中央から南に1.6mの地点で検出した鎮壇具埋納坑。東西64cm・南北52cm・深さ83cm。SX8103は、須弥壇中央から北に2.5mの地点の基壇上で検出した鎮壇具埋納坑。東西58cm、南北43cm、深さ63cm。

床束SS8130 SB8100の床張りの際の床束である。

廃棄土坑SK8131～8134 北側の裳階部分に掘られ、近世・近代の瓦等が出土した。

北面回廊

北面東回廊SC7510 複廊で、幅約10m。2間分確認した。基壇南半は地山削出しで北半は積土である。地山削出しの幅はSX8030と対応し、SC7510以前に単廊SC8055がある。北側に、凝灰岩地覆石抜取痕跡SX8053、玉石雨落溝SD7516をとまなう。SX8053は前回の調査のSX7517と一連である。SD7516は、幅40cm・深さ10cm。両側に玉石の側石を立てる。SD8051につながる。

北面西回廊SC8065 複廊で、幅10m。約3m分確認した。基壇の状況はSC7510と同様で、SC8065以前に単廊SC8070がある。基壇南側には凝灰岩地覆石列SX8066があり、その外側に幅40cmの玉石敷犬走SX8067が通り、さらに外側に玉石の雨落溝SD8068がある。SX8066の石材は転用材である。SD8068は、SD8050と一直線状につながる。SX8067・SD8068ともに上面が平坦面でなく、敷き方も粗い。これらの遺構は、SD8050などよりも時期が下がる。SC8065北側には、凝灰岩地覆石列SX8071、玉石の雨落溝SD8072がある。SD8072はSD7516と同じ状況を示し、SD8051につながる。回廊基壇北側の遺構はⅡ期の遺構である。

中金堂周辺の舗装

バラス敷SX7990～7992 II期階段SX8020・SX8040
積土によって埋められたI期のバラス敷舗装。SX7992は、
SX8035側に玉石の見切り石列SX7993をともない、SX8035・
SC8055に対応する。バラス敷が認められるのは、中金
堂基壇から3m程までである。

また、SX7990・7991下層で、I期階段地覆石と平行な
幅20cm、深さ5cmの溝状遺構SX7994・7995を検出した。
犬走の縁石採取または据付痕跡の可能性があり、バラス
敷以前に一時期を想定することができる。なお、バラス
上面で焼土は認められなかった。

玉石敷SX7550・8075 SX7550は、前回の調査でも
検出した、中金堂基壇南面に広がるII期の玉石敷。中央
部分で何石かについて確認したところ、目地には焼土が
入り込むが、裏側までは入らない。SX8075は、SD8051
の外側に幅90cmでまわるテラス状の玉石敷。外側見切り
石をとまなう。見切り石は高さ約5cmほどである。

北側バラス敷SX8076 SX8075の外側に幅100cmでまわ
るバラス敷。外側に15cmほどの玉石による見切りをとま
なう。SX8075と同時期か、先行する(図106-2)。

東側玉石敷SX8085 調査区東北隅のL字型の玉石敷。

幅1.6m、両側に見切り石をとまなう。見切内部は敷き
方も粗く、下層に焼土も観察された。SX8067に似る。

その他の遺構

埋甕遺構SX8015・8016 SX8005の先端東西、階段
から約2.5mにある。据付掘形は直径70cm・深さ25cm程で、
SX8016では甕も一部残存していた。推定復元径80cm以
上の須恵器の甕である。南面階段がSX8020に改造され
る際に壊される。I期の遺構である(図106-3)。

瓦溜SK8060～8064 SC7510北側に集中する土坑。
重複関係から、SK8060が最も古く、SK8064が最も新し
い。SK8064は焼け土や炭化材を含み、銅製の飾金具な
ども出土した(図106-4)。

瓦組暗渠SX8090 中金堂基壇南面に、基壇幅分東西
にのびる。丸瓦を伏せて並べる。東側は回廊雨落ちにつ
ながる様相を呈するが、残りが悪く判断しがたい。西側
は、中金堂基壇西端にそろえて南に折れる。瓦は中世。
側柱からの距離約7mで、応永再建中金堂の軒の出とほ
ぼ一致する。また、建物から同じような距離にある遺構
として、西側の溝SD8091がある。III期の遺構である。

幄舎SB7531～7534 前回の調査で検出したSB7531・
7532・7533・7534の隅柱跡などを検出した。(馬場 基)

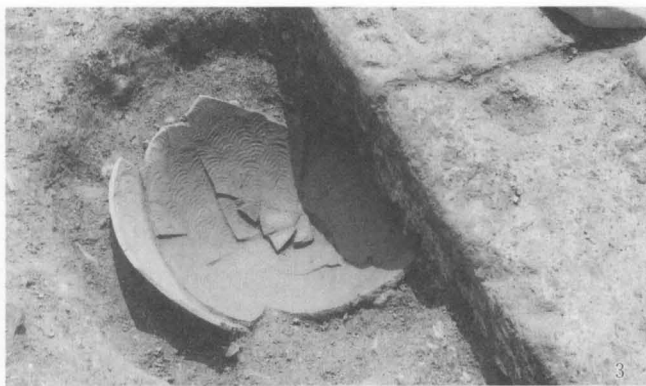


図106 中金堂周辺の遺構 1: SX7985 (西から) 2: SX8076 (北西から) 3: SX8016 (北西から) 4: SX8060～8064 (南から)

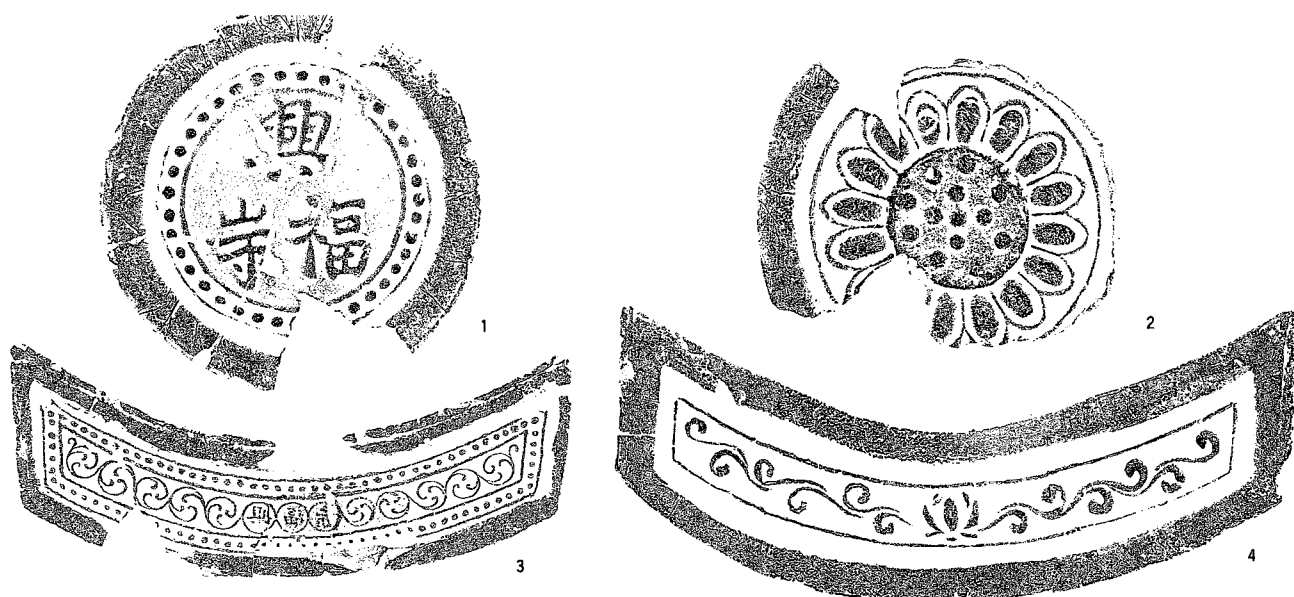


図107 土坑SK8064出土軒瓦の組合せ 1:3

4 出土遺物

瓦磚類

今回の発掘調査では合計34567点の瓦が出土した。その内訳は軒丸瓦177点、軒平瓦300点、丸瓦9101点、平瓦24966点、鬼瓦7点、鬘斗瓦16点、その他道具瓦32点である。出土瓦の所属時期は、興福寺創建の奈良時代初頭から近代にまでいたる。これらの資料については、既に『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅲ』（2002）で概略的な報告を終えている。全体的には特定の時代あるいは型式の瓦が、特定の遺構から集中的に出土する傾向は認められなかった。しかし基壇下東側に位置する土坑SK8064からは、例外的に特定型式の中世瓦が比較的まとまって出土した。よって本項では土坑SK8064出土の中世瓦を中心に報告する。

SK8064からは軒丸瓦21点、軒平瓦22点の合計43点の軒瓦が出土した。型式的には図107に示した4型式が全体の80%以上を占め、それ以外の型式の占める割合はごく僅かである。

軒丸瓦1は、「興福寺」の文字瓦で、外区には38の珠文を配する。瓦当表面には離れ砂が顕著に観察される。胎土には白色及び黒色粒子が多く含まれ、色調は暗灰色である。確実に本型式と判断される資料は3点であるが、その可能性がきわめて高い破片資料を含めると、合計11点が出土している。2は、大型の蓮華文軒丸瓦である。単弁12弁で、蓮子数は1+4+8である。被熱による赤化が顕著な資料が多い。合計10点の資料が出土した。

軒平瓦は、3と4の資料が多い。3は均整唐草文軒瓦である。外区には小型の珠文、瓦当中心には逆字体「興福寺」が配される。顎部には凹型台圧痕があり、瓦当裏面

にタテケズリが観察される。瓦凹面には密な布目痕が残るが、一部がナデ削られた資料もある。瓦当表面には離れ砂が顕著である。色調は暗灰色で、胎土に白色及び黒色の粒子を含む資料が多い。合計6点が出土している。4は大型の蓮華唐草文軒平瓦であり、下向・上向を1単位とする左右3単位の枝葉により唐草文は構成される。各枝葉は近接するが、基本的に分離している。瓦当上縁の面取りと、瓦当裏面のヨコナデが観察される。被熱により赤化した資料が多い。山崎信二によれば、3は鎌倉時代中頃（1210～1260）、4は鎌倉時代末頃（1300～1333）と編年される（『中世瓦の研究』奈文研 2000）。

以上、SK8064から出土した軒瓦について報告した。特定型式の軒瓦が、多く出土したことから、その中での軒瓦の組み合わせを考えることが可能である。具体的には、「興福寺」の文字を配した1と3は、焼成・胎土・色調・離れ砂の状態が近似することから、組み合わせを想定できる。また、2と4についても、文様やサイズ、赤化の状態から組む可能性が高い。

一方、この二組の軒瓦の組み合わせについては問題点も残る。軒平瓦については山崎の年代観を示した。しかし一方で、軒丸瓦1を鎌倉時代後半（1277～1327）、3は南北朝期（1327～1411）に位置づける見解もある（藪中五百樹「鎌倉時代に於ける興福寺の造営と瓦（上・下）」『佛教藝術』257・258号 2001）。この意見を採用した場合、1と3、そして2と4の組み合わせではそれぞれの年代観に齟齬が生じる。SK8064出土軒丸瓦の多くは、丸瓦部の遺存状態が悪く、有力な時期指標とされる吊紐痕跡を確認できなかった。吊紐痕跡の残る軒丸瓦の出土を待ち、今回示した4型式の軒瓦の年代観および組み合わせの妥当性を検証する必要がある。（渡辺文彦）

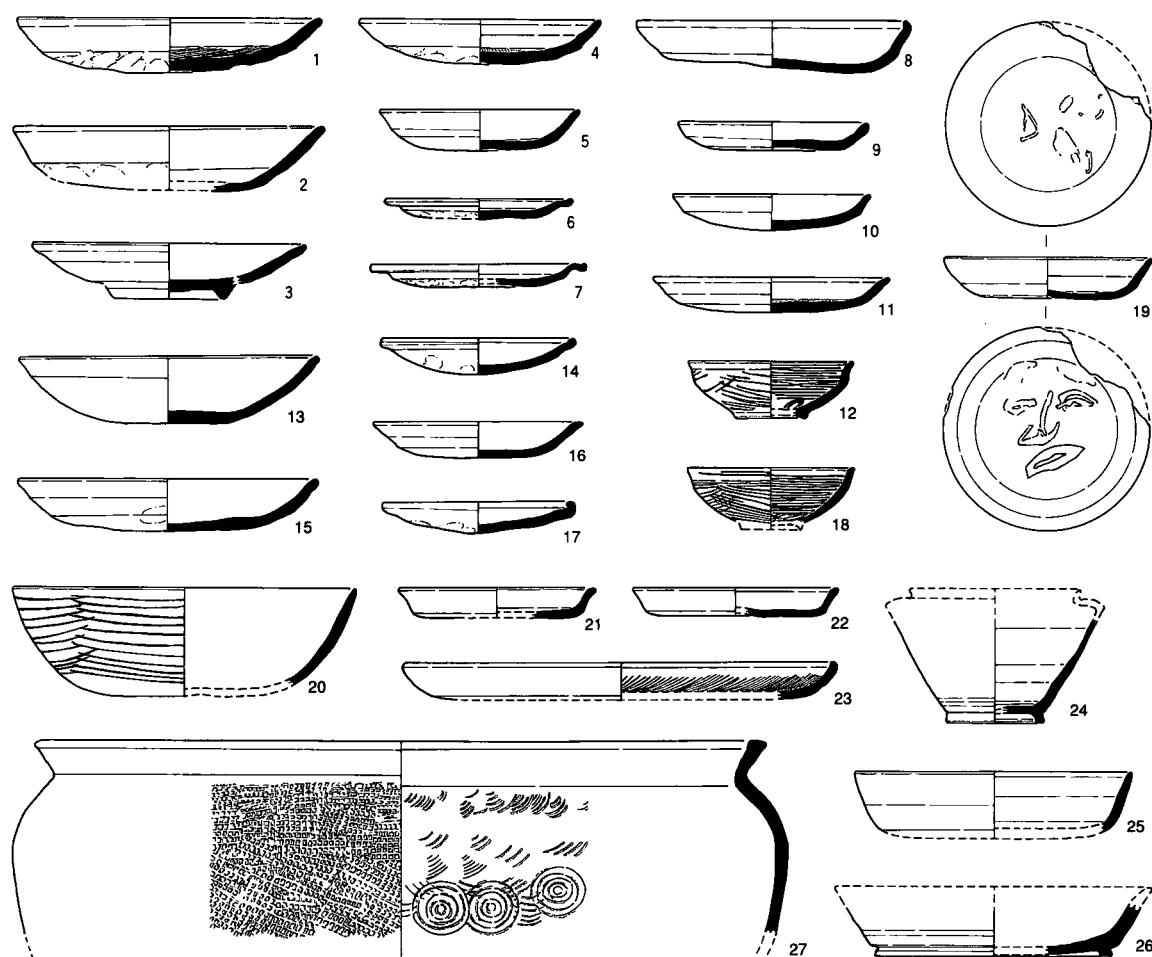


図108 第325次調査出土土器 1:4、27のみ1:6

土器・陶磁器

整理用コンテナ31箱分、時代的には古墳時代（5世紀後半）から近・現代にいたる各時代の土器・陶磁器が出土した。ここでは主に中金堂の創建や再建とかかわる遺構や堆積土層から出土した奈良・平安時代の土器についてふれる（図108）。

奈良時代の土器 出土量は極めて少量でかつ小片が多いが、相伴土器の中に確実に平安時代に降る資料は含まれず、中金堂創建の時期や基壇周辺の整備時期を示す資料として重要である。

土師器には、杯A、杯B蓋、皿A(23)、皿C(21・22)、碗A(20)、盤、甕がある。皿Cはいずれも灯火器として使用された油煙の痕跡を口縁部に残す。

須恵器には杯A(25)、杯B(26)・同蓋、高杯、壺、壺E(24)、小型平瓶、甕、甕C(27)などがある。20・23は須弥壇積土、21・24・26は南面五間階段積土、25は複廊時東階段積土、22は基壇南面外周バラス敷、27は創建期基壇の南面地覆石採取跡から出土した。また、基壇土積土、廂柱間の地覆石据付穴、創建時足場穴、南面中央階段斜前方の土器据付穴SX8016からも、各々奈良時代の須恵器が出土した。SX8016に埋められていた須恵器甕は現

存高27cm、現存最大径56cm。もともと、最大径80cmを越える須恵器大甕の上半部を打欠いて底部近くのみを利用したものであろう。

平安時代の土器 SA7958の間柱採取痕跡SX7965出土土器は、土師器の皿類のみで、火災による火熱は受けておらず、灯火器として使用された油煙の痕跡を口縁部に残すものが多い。製作手法や形態から三類に分けた。

A類皿は、やや丸みを帯びた底部と外上方にひらく口縁部からなり、器壁を厚く作る。底部外面に指押えの痕跡、内底面に刷毛目、口縁部外面には強い二段ナデの痕跡が明瞭に残る。法量から大・小に区分され皿AⅠ(1)は、口径15.8cm、器高2.9cm。皿AⅡ(4)は口径12.2~12.7cm、器高1.8~2.5cm。このほかに、断面三角形の高台をつけた皿(3)がある。B類皿は、平底状の底部と外方にのびる口縁部からなり、A類に比してやや深い器形となる。内底面の刷毛調整痕はなく、口縁部外面の二段ナデの痕跡も不明瞭である。大・小に区分され、皿BⅠ(2)は口径16.3cm、器高3.5cm。皿BⅡ(5)は、口径10.2~10.7cm、器高1.9cm~2.3cmあり、先の皿AⅡよりさらに口径が小さい。C類皿は、いわゆる「ての字状口縁」の小皿。口径10cm前後で器壁が0.5cm前後の一群(6)と、口径が

11.2cmで器壁が0.3cm前後の一群(7)があり、後者は時期的にやや先行するものであろう。

SX7962出土土器には、瓦器碗・小碗、土師器皿がある。瓦器碗には器壁が厚く内面のミガキの密なものと、器壁が薄くミガキの粗いものがあることから、少なくとも11世紀から12世紀代の複数の型式が混在しているようである。瓦器小碗(12)は、口縁部内外面に粗いミガキ・内底面にらせん暗文を施したもので、高台の断面形は三角形となる。土師器は全て皿であり、製作手法は基本的に先のB類と共通する。皿BⅠ(8)は、口縁部に二段ナデを施し、口縁端部を上方につまみあげる。口径14.2cm、器高2.7cm。皿BⅡは、いずれも口縁部に二段ナデを施し、底部が平底のもの(9)と丸底状になるもの(10)がある。口径9.9~10.4cm、器高1.4~2.0cm。このほかに皿AⅡ類(11)が1点ある。口径12.4cm、器高1.9cm。

SA7958の他の柱抜取痕跡のうち、このほかにSX7960からは瓦器小碗(18)、SX7963からは土師器皿(13・14)、SX7966からは瓦器小碗・土師皿が出土した。瓦器小碗は、内底面にジグザク状、口縁部の内外面に密なミガキを施したもので、先のSX7962出土小碗と比較して、形式的に先行する。以上のように、SA7958間柱の抜取痕跡出土土器は、基本的には灯火器に使用された土師器皿が主体となりながらも、その型式は単一ではない。これまでに知られている南都出土土器の年代観からすると、SX7965出土の土器は11世紀中頃、SX7962出土土器は11世紀中頃の土器を含みながらも、そのほとんどの土器は12世紀後半と考えられる。ほかの柱抜取痕跡出土土器にも明らかに新旧二時期の土器が混在している。

土坑SK8062からは、一括投棄された状態で土師器の皿が出土した。大小二種あり、大皿(15)は口縁部外面を強く二段ナデにし、口縁端部は丸く納める。小皿には、端部を丸く納めるもの(16)、やや尖り気味に納めるもの、「ての字状口縁」のもの、内側に折り曲げるもの(17)などの種々の形態が認められる。調整手法、口縁部の形態、法量等の点から、これらの土器の年代は先述の柱抜取痕跡SX7965出土の土器に近い時期と考えられる。

そのほかの注目すべきものとして、二彩壺片、灰釉碗・壺片、白磁片や底部の内外面に人面を墨書した鎌倉時代の土師器皿(19)などがある。

(川越俊一)

金属製品・石製品・ガラス製品その他

今回の調査では中金堂創建以前から現在までの多種多様な遺物が出土した。ここでは、創建期および廃仏毀釈後の中金堂返還にともなう鎮壇具について報告する。

創建鎮壇具に関わる遺物 中金堂の創建鎮壇具は、明治7・8年および17年に発見され、現在東京国立博物館(以下東博)および興福寺に所蔵されている。須弥壇東半の土坑SK8115が、鎮壇具発見に関わると考えられたため、埋土を持ち帰り、水洗選別と微細遺物の検出をおこなった。SK8115埋土およびその周辺からの出土遺物で、従来から知られていた遺品との一致等から鎮壇具の一部とみられるものには、金延金、砂金、コハク玉、水晶玉、ガラス玉、和同開珎、銅碗片などがある(巻頭図版5)。

金延金は2点。ともに幅7.6cm前後の薄板を巻きたたんだもので、厚さと重さはそれぞれ0.12~0.17mm、35.62gと、0.08~0.10mm、34.02g(図109上下)。東博所蔵の金延金9点は、いずれも帯金状に平らに延ばされているが、幅・重さなど、今回出土したものとの類似点がある。これらも本来は巻きたたまれていた可能性があるだろう。なお、同様に巻きこんだ金延金が豊浦寺金堂跡で出土している(『奈良県遺跡調査概報1994年度』橿原考古学研究所 1995)。飛鳥寺塔跡では、小さく折りたたんでおり、延金の埋納に二つの様式があったことがわかる。

砂金は6点を確認しているが、いずれも1cm以下の不定形なもので、重さ0.03~1.09g。



図109 SK8115および周辺出土の金延金・砂金

コハク玉・水晶玉は、ともに径7.5～8.5mmほどの念珠玉である。ガラス玉には、緑色の小玉がある。

南階段のV期の積土の中からも、鎮壇具の一部とみられるガラス玉、和同開珎が出土した。発見時の廃土が利用されたものであろう。ガラス玉は、平玉と呼ばれる碁石形のもので径14mm・厚さ6mmで緑色を呈する。同様の平玉は、東博所蔵の鎮壇具中に800点以上あり、濃緑・緑・緑黄・黄・黄褐・褐・濃褐色等の多彩なものが知られている。

また、こうした鎮壇具が再埋納された可能性のある遺構が2箇所で見つかっている。SX8120の掘形上層からは、真珠163点、水晶玉91点が出土した。水晶玉の内訳は碁石状の平玉87点、丸玉3点、念珠玉1点である。

須弥壇西南隅のSK8125からは、丸玉2点、平玉1点、辻玉1点、念珠玉1点が出土した。丸玉は、径29mmのものと24mmのもの。辻玉は、径21mm厚さ9mmの円盤形を呈し、円の中央に1孔と側面から十字に孔をうがつ。

廃仏毀釈以降の鎮壇具 中金堂返還後に積み直された須弥壇SX8110上およびその背面の土坑SX8101～8105から、近代の鎮壇具が出土した（巻頭図版6参照）。

SX8101出土の水瓶形容器は、金銅製で総高25.5cm。いわゆる仙蓋形水瓶（軍持）を模したものであろう。本体は長卵形の胴部と径2.9cm、高さ4.7cmの円筒形の頸部、および裾径8.4cmの低い高台からなる。頸部には印籠蓋をかぶせ、頂面中央に注口（尖台）にあたる高さ3cmの中実の丸棒がつく。この棒の付け根と頸部中程、および高台の上辺を起点に4方向に組紐がかけられていた。胴部側面には4行にわたり「興福寺中金堂鎮／明治十七歲十二月十日／謹修當寺住職／園部忍慶敬白」との銘文が刻まれている。なお、X線撮影によって、容器内には玉類などが納められていることが判明した。

SX8102～8105からは、各1基の箱形容器が出土した。いずれも金銅製で経箱あるいは密教の用具などをおさめた戒体箱にみられる形制をとる。本体は、縦30.6cm、横14.8cm、総高15.3cm。下部には長辺4箇所、短辺2箇所の格狭間を透かした床脚を付す。蓋表と体側4面に唐草を線刻で表す。内底面に金銅製の銘板を据える。

SX8102は、銘板上中央に銀色を呈する小壺を置き周囲に4枚の錢貨を納める。小壺は、総高6.3cm、体部径8.6cmの葉壺形で、径5.7cmの蓋には山形で扁平なつまみ

をつける。体部は上下二段に花唐草と鳥文、蓋表には内区に鳥文と飛雲文、外区に花唐草を配し地を魚子で埋める。小壺内には、錢貨11枚と真珠5粒を納める。

SX8104は、銘板上中央に合子を置き、周囲に95枚の錢貨を納める。合子は径3.6cm、高さ2.9cmで、蓋上面に文様を刻む。垂飾形をした赤色の玉類を納めていた。

SX8105は、銘板上中央に合子を置き周囲に緡錢5緡等を納める。合子は、SX8104のものと同形式で、径4.2cm、高さ3.1cm。中に垂飾形・勾玉形をした緑色・青色の玉類を納める。

SX8103は、銘板上中央に金色を呈する小壺を納める。小壺はSX8102のものと同形式だが径8.8cm、総高6.3cm、蓋径6.2cmで体部の形態と蓋の径、文様の細部に差異がある。中には垂飾形・勾玉形をした黄色の玉類、金環、舍利容器が納められていた。

4基の容器内の銘板の銘文は、東西容器が同文、北がほぼ同文で、南は前三者とは文・字体ともに異なる。東西容器銘板では、「興福寺金堂鎮壇銘並序／大正五歲丙辰十月興福寺沙門良謙等」にはじまる銘文が18行刻まれ、金堂修造の経過を記す。ただし、年代を確認することのできた錢貨には、大正6年および7年発行のものも含まれ、実際の埋納時期については、さらに検討する必要がある。（次山 淳）

5 まとめ

今回の調査により、中金堂および北面回廊の創建期の形態とその後の変遷の状況について、多くの知見を得ることができた。創建期に関しては、基壇が地山削出であること、南面階段が一間幅3基であったこと、北面回廊が単廊の形態をとっていたことなどがあげられる。

また、創建鎮壇具についても、須弥壇の東半で検出した土坑が、明治7年の発見に関わるものであると考えられた。埋納位置の確認に加え、あらたに出土した遺物から、現在知られているよりもさらに多くの品が埋納されてされていたことを知ることができた。

一方で、創建期の伽藍配置、最初の改造の時期、裳階が振隅になる可能性など、今後の検討課題も多い。

本調査の概要はすでに、『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅲ』（興福寺 2002）として公表しているので、合わせて参照されたい。（馬場 基）